

## 中国人・韓国人学習者と日本語母語話者に見られる 敬語動詞の誤用訂正能力

宮田 剛章

東京都立大学 大学院  
[infinitesimal@hotmail.com](mailto:infinitesimal@hotmail.com)

### The Error Correction Competence of Chinese and Korean Learners of Japanese and Japanese Native Speakers

Takeaki Miyata

Tokyo Metropolitan University, Graduate School

#### Abstract:

To illustrate the acquisition of honorifics among native and non-native language learners, this study investigated the error correction competence of honorific verbs produced by Chinese and Korean second language learners and Japanese native speakers. On the whole, the learners showed a distinct increase in error correction competence according to their Japanese proficiency. However, no significant differences in error correction competence of *kenjogo* verbs could be found among the learners in the lower and upper proficiency groups. The test revealed positive language transfer particularly among the Korean learners of the upper proficiency group where they utilized their Korean language knowledge in their grammatical judgment of Japanese honorific forms.

#### 1. はじめに

日本語学習において学習者が抱える問題の1つに敬語が挙げられる。平林他 (1988) が指摘するように、敬語が難しいといわれるのは文法形式によるのではなく、複雑な人間関係を考えた上で1つの適切な表現形式を選ばなければならないからであろう。また敬語運用の危険性について、熊井 (1992) は、文法的な誤りと違って間違いであってもそのように認識されにくいだけに、態度やパーソナリティーの問題と結び付けられる可能性が高く、対人関係に深刻な摩擦を起こしかねないとしている。このように日本語学習者の敬語運用に問題がある一方、ある程度意思疎通が可能になってくる中・上級学習者の敬語への関心は高く、円滑な人間関係を維持するための手段として敬語の運用を高めたいと考えているように思われる。従っ

て、日本語教師は文法面だけではなく敬語を含めた待遇表現もそのような意欲的な学習者の要望に応じて適切な指導をしていかなければならない。しかし、敬語学習の問題点は教師や学習者の直感の域を出ず、文法面や待遇面における習得の程度は分かっていない。そこで、日本語学習者がどのように敬語を習得しているかを実証的に調査する必要があるが、敬語に関する実証研究は筆者の知る限り非常に少ない。

本稿の目的は、文法的小よび社会言語的側面から中国人・韓国人日本語学習者と日本語母語話者の敬語動詞<sup>1</sup>の誤用訂正能力<sup>2</sup>を調査・分析し、敬語習得の一端を明らかにすることである。

## 2. 調査・分析方法

調査協力者は20代から30代で、中国語を母語とする中国人学習者（男性20名、女性54名、計74名）<sup>3</sup>、韓国語を母語とする韓国人学習者（男性17名、女性54名、計71名）、および1年を超える社会経験を持つ日本語母語話者（男性25名、女性32名、計57名）である。また本稿の中国人および韓国人学習者は全員日本に在住し、日本語学校や大学の留学生センターや別科で既にフォーマルインストラクションを受けた、または現在受けている者である。宮田（2005）が同一の中国人および韓国人学習者を対象としたインタビューと定量分析を行った結果、言語生活上、日本に滞在していても一般的に敬語の産出機会が少なく、敬語動詞は教室外での自然習得より教室内などでの学習による習得の影響が強いことが分かっている。調査時期は2001年2月、2002年9月～2003年3月である<sup>4</sup>。まず調査協力者のプレースメントのため、手紙文<sup>5</sup>の作成というタスクを与えた。プレースメントの基準<sup>6</sup>として牧野（1995）を参照し、中国人・韓国人学習者をそれぞれ上位・下位群に分け、それに日本語母語話者の群を加えた計5群を分析対象とした。また、学習者の敬語動詞の誤用訂正能力を測定するため、文法性判断テストを出題した。次に本稿で用いた敬語機能の分類に

ついて説明する。尊敬語と謙譲語については蒲谷他 (1998)、菊地 (1980) を参考に、従来の敬語機能と区別した。表 1 に本稿で用いる敬語動詞の機能分類を示した。

表 1 敬語機能の再分類

従来の敬語機能	本稿の敬語機能	
尊敬語	尊敬語	話し手が行為者に配慮：(お/ご)～になる、～られる、なさる、おっしゃる、召し上がる、など
謙譲語	謙譲語	話し手が行為者に配慮を与えず、関係者に配慮：(お/ご)～する、拝見する、申し上げる、など
	丁重語	話し手が行為者に配慮を与えない・場の改まり⇒話し手が聞き手に配慮：いたす、参る、申す、ござる、存じる、おる
丁寧語	丁寧体	話し手が聞き手に配慮：～です、～ます、～でございます、～であります

しかし日本語学で扱う丁寧語は助動詞に当たるのだが、宮地 (1982) は待遇上の文体を決定する力を持ち丁寧体としていることから、本稿でもこの用語を用いる。

文法性判断テストは尊敬語問題、謙譲語問題、丁重語問題、採点対象外問題<sup>7</sup>から成り、それぞれ 16 問、24 問、16 問、14 問から構成されている。全ての問題の文体は丁寧体で単文形式である。誤用訂正能力を測定するにあたり各設問では上・超絶レベルの語彙を避け、他の影響がないように考慮した。それぞれの問題には敬語動詞が用いられ、そこに下線部とその下に括弧を設定した。そして下線の敬語動詞の用法が誤っていると思えば書きなおし、正しいと思えば丸を書くよう指示した。場面設定は話し手である「私」が聞き手である「A先生」に話しかけている場面である。他の登場人物として「私」の「父」と他の先生である「B先生」が話題にあがるが、「私」と「A先生」とは同席していない。従って話し手である「私」は「A先生」、「B先生」に対し、高い待遇が必要とされる設定となる。

形態・統語上誤った敬語問題を「文法的誤用問題」とし、敬語使用にお

ける「文法的誤用訂正能力」を測る設問とする。また待遇上誤った敬語問題を「人間関係の誤用問題」とし、「社会言語的誤用訂正能力1」を測る設問とする。さらに謙譲語の場合、謙譲語を使用する際には動作に関わる人物（関係者）が必要とされる。それ故関係者の不在時は謙譲語が使用できない規則から、「関係者不在問題」を謙譲語問題に追加した。関係者不在問題の誤用訂正は文法・形態面で正しくても状況を考慮する必要があり、「社会言語的誤用訂正能力2」を測る設問とする。表2に文法性判断テストの問題とその解答例を示す。

表2 文法性判断テスト問題の特徴と例文・解答例

敬語問題	問題の下位分類	問題の特徴と例文・解答例
尊敬語問題 (16問)	人間関係の誤用問題	話者や話者のウチの者を行為者にして尊敬語を使うべきではないのに、使っている。 例文) 父は明日東京へ <u>いらっしゃいます</u> 。 解答例) 参ります、行きます、など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に尊敬語が不適切になっている。 例文) B先生はA先生に授業についてなにか <u>尋ね</u> になりましたか。 解答例) お尋ねになりましたか、聞きましたか、など。
謙譲語問題 (24問)	人間関係の誤用問題	ソトの者を行為者にしたたり、話者や話者のウチの者を関係者にしたたりして、謙譲語を使うべきではないのに、使っている。 例文) A先生は私の家 <u>にうかが</u> いましたか。 解答例) いらっしゃいましたか、来ましたか、など。
	関係者不在問題	謙譲語には必ず関係者が必要なのに、関係者が存在しない。 例文) 私はタバコを <u>お吸い</u> します。 解答例) 吸います、など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に謙譲語が不適切になっている。 例文) 父はB先生に経済の本を <u>拝借</u> にしました。 解答例) 拝借しました、借りました、など。
丁重語問題 (16問)	人間関係の誤用問題	ソトの者を行為者にして丁重語を使うべきではないのに、使っている。 例文) B先生は次はアジア経済を <u>研究</u> いたします。 解答例) ご研究になります、研究します、など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に丁重語が不適切になっている。 例文) 父はわたしに <u>経済学</u> について <u>質問</u> いたんです。 解答例) 質問いたします、質問します、など。

尊敬語問題、謙讓語問題、丁重語問題はそれぞれ1問2点である。文法上かつ待遇上正しければ2点、回答が不十分であれば1点、そうでなければ0点とした<sup>8</sup>。採点后、独立群・対応群を対象に数理統計学的処理を行った。手法については結果の章あるいは注で適宜説明をしていく。

### 3. 結果

#### 3.1 予備検定

まず分析結果を提示する前に、文法性判断テストの信頼性を調べるべく、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、信頼性が高いことが確認された ( $\alpha = 0.9477$ )。次に比較する群の説明をする。独立群 (群を構成する標本に違いがあるパラメータ) を日本語レベル・母語を、対応群 (群を構成する標本に違いがないパラメータ) を誤用問題・敬語機能を基準に分ける。独立群は、中国人学習者および韓国人学習者の上位群・下位群に日本語母語話者を合わせた5群である (以下、中・下、中・上、韓・下、韓・上、日、の略を用いる)。対応群は、尊敬語・謙讓語・丁重語の文法的誤用訂正能力および社会言語的誤用訂正能力1、謙讓語の社会言語的誤用訂正能力2の7群である (以下、尊・文、丁・社1、謙・社2、の略などを用いる)。

独立群を比較するのに当たり、日本語レベル別に分析するのに「中・下-中・上-日」と「韓・下-韓・上-日」を、母語別に分析するのに「中・下-韓・下」と「中・上-韓・上」を、それぞれ今後分析をするための組み合わせとする<sup>9</sup>。また対応群を比較については、それぞれ性質の異なる能力の比較ということになるため、それぞれの誤用問題・敬語機能の難易度の問題が発生し、妥当性の問題が残る。そのため、本稿では対応群の比較は行わないことにする。

次に検定を始める前に予備検定として Shapiro-Wilk の検定<sup>10</sup>を行った (表3参照)。その結果、35群中27群が5%水準で棄却され、正規性が疑わしいことが分かった。そのことから、今後1部の組み合わせ (尊・社1

および謙・社1における中・下と韓・下の比較)を除いて基本的にノンパラメトリック検定を行っていく。3.2で独立群の比較をし、結果を述べる。

表3 Shapiro-Wilkの検定結果(括弧内は独立群の標本数)

	中・下 (55)	中・上 (19)	韓・下 (37)	韓・上 (34)	日 (57)
尊・社1	0.223	0.061	0.066	0.002*	0.000*
尊・文	0.001*	0.016*	0.034*	0.003*	0.000*
謙・社1	0.138	0.372	0.097	0.005*	0.000*
謙・社2	0.000*	0.026*	0.001*	0.000*	0.000*
謙・文	0.002*	0.242	0.202	0.008*	0.000*
丁・社1	0.001*	0.022*	0.014*	0.000*	0.000*
丁・文	0.001*	0.009*	0.020*	0.013*	0.000*

### 3.2 独立群の比較

まず尊敬語の社1と文、謙讓語の社1・2と文、丁重語の社1と文について、それぞれ「中・下-中・上-日」と「韓・下-韓・上-日」の組み合わせで、ノンパラメトリック検定の一種である Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果、どれも 0.05% 水準で棄却された ( $p=0.000$ )。このことから、どこかのペアに少なくとも1つ差があることが分かった。そこで次に多重比較を行った。多重比較法として Mann-Whitney U 検定<sup>11</sup>(中・下と韓・下はt検定)を行い、有意水準の再設定は Tukey-Welche choice<sup>12</sup>により、5%水準を維持する(次ページ表4参照)。

尊・社1の場合、どの日本語レベルの間でも、また中・韓の間でも統計的有意差が見られた。そのことと平均ランク(または平均値)から、日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高く、韓国人学習者が中国人学習者よりも誤用訂正能力が高いことが分かる。

一方、尊・文の場合、中国人学習者はどの日本語レベルの間でも差が見られたが、韓国人上位群と日本語母語話者との間には差が見られず、下位群との差が確認された。以上のことと平均ランクから、概して日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高くなることが分かる(特に韓国上位は、日本

語母語話者のレベルに近くなっている)。また中国下位群と韓国下位群との間には差が見られなかったが、中国上位群と韓国上位群との間には差が確認された。このことと平均ランクから、韓国上位は中国上位よりも誤用訂正能力が高いことが分かる。また、中国下位と韓国下位の誤用訂正能力は同じぐらいだと考えられる。

表4 独立群の比較（尊敬語の場合）

対応群	群の組み合わせ	順位和（平均ランク）	U 値	p 値
尊・社1	中・下、中・上	1840.5, 934.5 (33.46, 49.18)	300.5	0.006*
	中・下、日	1774.5, 4553.5 (32.26, 79.89)	234.5	0.000*
	中・上、日	412.5, 2513.5 (21.71, 44.10)	222.5	0.000*
	韓・下、韓・上	1005.5, 1550.5 (27.18, 45.60)	302.5	0.000*
	韓・下、日	967.5, 3497.5 (26.15, 61.36)	264.5	0.000*
	韓・上、日	1177.5, 3008.5 (34.63, 52.78)	582.5	0.001*
	中・上、韓・上	404.0, 1027.0 (21.26, 30.21)	214.0	0.039*
	群の組み合わせ	Levene 検定 <sup>13</sup> （平均値の差）	t 値(自由度)	p 値
	中・下、韓・下	0.869 ( 8.24-9.92 =1.68)	-2.101 (90)	0.038*
尊・文	群の組み合わせ	順位和（平均ランク）	U 値	p 値
	中・下、中・上	1870.5, 904.5 (34.01, 47.61)	330.5	0.017*
	中・下、日	1905.0, 4423.0 (34.64, 77.60)	365.0	0.000*
	中・上、日	446.0, 2480.0 (23.47, 43.51)	256.0	0.001*
	韓・下、韓・上	1005.5, 1550.5 (27.18, 45.60)	302.5	0.000*
	韓・下、日	1014.5, 3450.5 (27.42, 60.54)	311.5	0.000*
	韓・上、日	1344.5, 2841.5 (39.54, 49.85)	749.5	0.067
	中・下、韓・下	2390.0, 1888.0 (43.45, 51.03)	850.0	0.179
中・上、韓・上	408.0, 1023.0 (21.47, 30.09)	218.0	0.049*	

同様に、謙譲語について、独立群の多重比較の結果を表5に示す（次ページ）。謙・社1の場合、韓国人学習者はどの日本語レベルの間でも、統計的な有意差が見られたが、中国人学習者は下位群と上位群に差がなかった。以上のことと平均ランクから、概して日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高くなることが分かる。また、中国下位群と韓国下位群の間には差がなかったが、中国上位群と韓国上位群の間には差が見られた。このことと平均ランクから、韓国上位は中国上位よりも誤用訂正能力が高いことが分か

る。また、中国下位と韓国上位の誤用訂正能力は同じぐらいだと考えられる。

一方、謙・社2の場合、統計的な有意差が、中国および韓国の上下群の間には見られず、日本語母語話者との間に見られた。また、下位群および上位群の中・韓の間にも有意差は見られなかった。このことから、誤用訂正能力は、日本語学習者のレベル・母語に関係なく同じぐらいであると言える。平均ランクを見ると、誤用訂正能力は日本語母語話者よりも低いと考えられる。

表5 独立群の比較（謙讓語の場合）

対応群	群の組み合わせ	順位和（平均ランク）	U 値	p 値
謙・社1	中・下、中・上	1956.5, 818.5 (35.57, 43.08)	416.5	0.188
	中・下、日	1853.0, 4475.0 (33.69, 78.51)	313.0	0.000*
	中・上、日	363.0, 2563.0 (19.11, 44.96)	173.0	0.000*
	韓・下、韓・上	930.5, 1625.5 (25.15, 47.81)	227.5	0.000*
	韓・下、日	942.0, 3523.0 (25.46, 61.81)	239.0	0.000*
	韓・上、日	1272.5, 2913.5 (37.43, 51.11)	677.5	0.015*
	中・上、韓・上	367.0, 1064.0 (19.32, 31.29)	177.0	0.006*
	群の組み合わせ	Levene 検定（平均値の差）	t 値（自由度）	p 値
中・下、韓・下	0.484 ( $ 6.91-6.62 =0.29$ )	0.349 (90)	0.728	
謙・社2	群の組み合わせ	順位和（平均ランク）	U 値	p 値
	中・下、中・上	1976.5, 798.5 (35.94, 42.03)	436.5	0.283
	中・下、日	1843.0, 4485.0 (33.51, 78.68)	303.0	0.000*
	中・上、日	355.5, 2570.5 (18.71, 45.10)	165.5	0.000*
	韓・下、韓・上	1304.5, 1251.5 (35.26, 36.81)	601.5	0.749
	韓・下、日	956.5, 3508.5 (25.85, 61.55)	253.5	0.000*
	韓・上、日	861.0, 3325.0 (25.32, 58.33)	266.0	0.000*
	中・下、韓・下	2468.0, 1810.0 (44.87, 48.92)	928.0	0.471
中・上、韓・上	526.5, 904.5 (27.71, 26.60)	309.5	0.800	
謙・文	中・下、中・上	1772.0, 1003.0 (32.22, 52.79)	232.0	0.000*
	中・下、日	1774.0, 4554.0 (32.25, 79.89)	234.0	0.000*
	中・上、日	419.5, 2506.5 (22.08, 43.97)	229.5	0.000*
	韓・下、韓・上	1013.5, 1542.5 (27.39, 45.37)	310.5	0.000*
	韓・下、日	884.5, 3580.5 (23.91, 62.82)	181.5	0.000*
	韓・上、日	1135.0, 3051.0 (33.38, 53.53)	540.0	0.000*
	中・下、韓・下	2339.5, 1938.5 (42.54, 52.39)	799.5	0.080
	中・上、韓・上	471.0, 960.0 (24.79, 28.24)	281.0	0.429

謙・文の場合、中・韓に関係なく、どの日本語レベルの間でも、統計的有意差が見られた。このことと平均ランクから、日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高いことが分かる。また、上下位群に関係なく、中・韓の間に差がなかった。このことから、中国人学習者と韓国人学習者の誤用訂正能力は同じぐらいだと考えられる。

同様に、丁重語について、独立群の多重比較の結果を表6に示す。

表6 独立群の比較（丁重語の場合）

対応群	群の組み合わせ	順位和（平均ランク）	U値	p値
丁・社1	中・下、中・上	1773.0, 1002.0 (32.24, 52.74)	233.0	0.000*
	中・下、日	2417.5, 3910.5 (43.95, 68.61)	877.5	0.000*
	中・上、日	793.5, 2132.5 (41.76, 37.41)	479.5	0.448
	韓・下、韓・上	1007.0, 1549.0 (27.22, 45.56)	304.0	0.000*
	韓・下、日	1507.0, 2958.0 (40.73, 51.89)	804.0	0.049*
	韓・上、日	1892.0, 2294.0 (55.65, 40.25)	641.0	0.006*
	中・下、韓・下	2334.0, 1944.0 (42.44, 52.54)	794.0	0.074
	中・上、韓・上	429.5, 1001.5 (22.61, 29.46)	239.5	0.106
丁・文	中・下、中・上	1738.5, 1036.5 (31.61, 54.55)	198.5	0.000*
	中・下、日	1705.0, 4623.0 (31.00, 81.11)	165.0	0.000*
	中・上、日	484.0, 2442.0 (25.47, 42.84)	294.0	0.001*
	韓・下、韓・上	1056.5, 1499.5 (28.55, 44.10)	353.5	0.001*
	韓・下、日	828.5, 3636.5 (22.39, 63.80)	125.5	0.000*
	韓・上、日	1020.0, 3166.0 (30.00, 55.54)	425.0	0.000*
	中・下、韓・下	2433.5, 1844.5 (44.25, 49.85)	893.5	0.319
	中・上、韓・上	552.0, 879.0 (29.05, 25.85)	284.0	0.464

丁・社1の場合、韓国人学習者はどの日本語レベルの間でも統計的有意差が見られたが、中国人学習者は上位群と日本語母語話者との間に差がなかった。以上のことと平均ランクから、概して日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高くなることが分かる（特に中国上位は、日本語母語話者のレベルに近くなっている）。また上下位群に関係なく中・韓の間に差が見られなかった。このことから、中国人学習者と韓国人学習者の誤用訂正能力は同じぐらいだと考えられる。

一方、丁・文の場合、中・韓に関係なくどの日本語レベルの間でも統計的有意差が見られた。そのことと平均ランクから、日本語レベルが高いと誤用訂正能力が高いことが分かる。上下位群に関係なく中・韓の間で差が見られなかった。このことから、中国人学習者と韓国人学習者の誤用訂正能力は同じぐらいだと考えられる。

#### 4. 考察

これまで中国人・韓国人学習者を対象に敬語動詞の誤用訂正能力を測定し、その結果をまとめてきた。概して日本語学習者は日本語レベルが日本語母語話者に近づくとつれ、誤用訂正能力が高くなることを確認することができた。ただ、必ずしもそうではないところもある。上位群学習者が日本語母語話者に近い能力を示し習得が進行していると思われる面（尊・文の韓・上と日の間、丁・社1の中・上と日の間）も見られた。しかし逆に謙譲語において下位群と上位群に能力差がなく習得が停滞している側面（謙・社1の中・下と中・上の間、謙・社2の中・下と中・上の間、謙・社2の韓・下と韓・上の間）もある。宮田 (2004) の仮説によると、規則が多くまた複雑であるほど、学習者の言語中枢において習得に向けて過剰般化と簡略化がより活発になり、その結果が規則的な誤用を多く生み出すことに繋がるとしている。謙譲語では話し手が上位者を主語に置いたり、同等・下位者を関係者に置いたりすることが許されず、また必ず関係者が存在しなければならないことから、社会言語的規則において謙譲語は尊敬語や丁重語よりも多いといえる。本稿の謙譲語の結果は、宮田 (2004) の仮説を裏付けているものと思われる。

佐治 (1983) と興水 (1977) によると、現代中国語における敬語は敬称（例：先生、同志、您など）にのみ使われ、動詞レベルには存在していないことから、韓国人学習者と比べ中国人学習者の母語転移の影響はそれほど強くないと考えられる。そのことを踏まえると、母語間の比較において、

概して韓国人学習者が正の転移を起こしていると思われる面がいくつか見られた（尊・社1の上位群間と下位群間、尊・文の上位群間、謙・社1の上位群間）。金田一他（編）（1988：653）によると、韓国語の敬語動詞には尊敬語と謙讓語があり、丁重語はない。そのため、丁重語に母語間の差異が見られなかったといえる。第二言語のある体系的特性が母語に調和し、かつ中間言語がある段階まで発達すると転移が起こるという Zobl (1980) の主張にあるように、中間言語が不安定な下位群よりもより安定した上位群に転移の影響が見られる。しかしながら、Faerch & Kasper (1987) が主張するように、転移の仮説は言語的要因に限ったことではなく、心理言語的・社会心理的転移<sup>14</sup>も考えられる。尊敬語と謙讓語において言語的に転移できる材料は基本的に韓国人学習者ならいつでも保持している。しかし心理言語的にまだ母語と第二言語である日本語との距離を感じている下位群の韓国人学習者は、中間言語が不安定であるが故に第二言語へ調和できず、結局中国人学習者と同じ習得となっていると考えられる（尊・社1に関しては、心理言語的要因が影響していなかったのであろう）。因みに、社会心理的要因は本稿では一様に統制されているため、転移への影響は考えがたい。

## 5. 日本語教育への提言

本稿では、中国人・韓国人学習者の敬語動詞における誤用訂正能力を文法的小よび社会言語的側面から検証を行ってきた。誤用に気づきそれを正しく訂正できる能力は言語能力の一部であり、日本語学習者の運用における自己モニターリングに重要な能力であると考えられる。それ故、表面的な運用だけでは分からない側面を明らかにしたといえる。教育現場では、学習者の母語・日本語レベルに関わらず、尊敬語と丁重語を運用する際に活用や接続など文法面の強化に十分な時間をかけて定着を図り、その後敬語使用の際に必要な社会言語的能力を高めるタスクをし、謙讓語なら待遇面で

の複雑さを考慮しながら、文法と共に均等に指導するなど行うといいだろう。またもし韓国人学習者だけの教室があり、日本語教師が韓国語に精通しているならば、初級から中級にかけての敬語項目が既に導入されている学習者には、間違いを恐れさせず積極的に母語転移を促す指導もしてみるのもいいだろう。敬語機能、あるいはクラスの状況によって指導する力点を効率よく変えてみる余地がある。

## 6. 今後の課題

本稿では、敬語の文法的誤用訂正能力および社会言語的誤用訂正能力を実証的に測定した。本稿の文法性判断テストでは主に言語能力の一端を測定しているにすぎず、実際の敬語運用がどのように展開されるかは未知である。書き言葉なのか、話し言葉なのかでも媒体でも敬語運用に大きく影響するであろう。また二次的ウチ・ソトの概念（例えば、社長は私にとって上位者であるが、他会社の社員や顧客が聞き手になった場合の社長は上位者ではなく同等として扱う）というさらに複雑な状況設定での調査はなされていない。また本稿は敬語動詞のみ調査対象としているが、名詞、イ・ナ形容詞など他の品詞の習得研究も今後の課題である。日本語学習の習得順序や中間言語形成の要因とされる簡略化や転移などの認知活動を解明する試みは新たな仮説を生み出し、第二言語習得研究を促進することになるだろう。また同時にそれは教材開発や現場の教員が日本語を指導する助けに繋がるものであり、今後もより多くの実証研究が望まれる。

## 注

- 1 敬語には「おっしゃる」等の動詞、「拙著」等の名詞、「おはようございます」などの慣用句や「よろしい」等の形容詞もある。本稿では動詞だけに着目し、敬語動詞と称する。
- 2 誤用訂正能力とは、ある文法項目なり語彙なりを産出あるいは理解する際、誤りに気づきそれを適切な形へ訂正することができる能力である。本文で出題形式について詳しく述べているが、文法性判断テストの回答は現実に産出されて

いるもので厳密には運用ではあるが、文・談話レベルではなく語レベルで回答は短く、かつ回答には言語知識・規則が必要とされることから、誤用訂正能力を言語能力の1種と定義し、回答もそれを反映しているものとする。

- 3 本稿の対象となった中国人話者は、中国北中部出身者のみに厳選し、香港などの広東語話者、政治社会体制が異なる台湾出身者、吉林省出身者の朝鮮語話者、チベット語話者は含めていない。
- 4 初めの調査では主に中国人学習者を、後の調査では韓国人学習者および日本語母語話者のデータを収集した。2つの調査時期に大きな時間的隔たりはなく調査方法は全く同一であるため、本研究でデータを合併することにした。
- 5 この際解答時間・手紙文の字数は問わなかったが、手紙文に関しては想像を豊かにして、可能ならば文章が1、2文で終わらないよう指示した。手紙の題目は「あなたは学校で A 先生とよく話をするぐらい親しい関係です。あなたはある日、A先生の家へ行きました。そのとき、A先生から高価な皿を借りました。しかし、あなたはそれを割ってしまいました。あなたはA先生にすぐに会うことができません。A先生に手紙を書いてください。」である。手紙文を「謝罪」を促す題目にすることで、超・上級レベルまで判定を可能にしている。上級学習者以上なら単なる謝罪で終わらず理由付けや心情などを段落レベルで叙述・描写することが期待でき、超級学習者ならさらに読み手の「A先生」への配慮（敬体・常体のシフト調整や敬語使用など）を観察することができる。また謝罪という性質上、非言語行動を重視し、言語行動に表出しにくくなるという恐れもあることから、極端な設定（「ちょっと足を踏んでしまった」とか「車で人をはねた」など）を避けた。
- 6 一般に日本語学習者のプレースメントには、様々な方法（日本語能力試験の合否、学習歴・学習時間、教育機関独自の試験など）があるが、汎用性・妥当性という点で問題が指摘されている。現在ライティングの評価に最も適した方法はなく、依然として大きな問題であることに変わりはないが、ACTFLの言語運用基準を用いることでこのような問題が軽減できると思われ、プレースメントの手段として本稿に採用した。

ACTFLの提唱する言語運用基準の書く技能の汎言語的記述は、大きく初級一下／初級一中／初級一上、中級一下／中級一中／中級一上、上級／上級一上、超級の9段階からなっている。初級一下から超級まで1から9までの点数を割り振り、2人の評価者（日本語母語話者の日本語教師）により調査協力者の手紙文を評価した。2人の評価の点差が0、または1なら、2人の評価点の和を2で割る。点差が2以上なら、3人目の日本語教師により評価され、前の2人が行った評価のうち点数が近いものとの点数と平均をとり、それを評価とする。例えば、評価者Aと評価者Bがそれぞれ4点と6点を付けたとする。この場合2人の点差が2点なので、3人目の評価者Cも評価に参加しなければならない。Cが7点を付けたら、Aの4点よりもBの6点のほうが近いので  $(7+6)/2=6.5$ 点とする。Cが3点ならAの4点の方が近いので  $(3+4)/2=3.5$ 点とする。

Cが5点ならちょうどAとBの評価点の平均なので、そのまま5点とする。この評価法により、3以上（「初級一上」以上）7未満（「上級」未満）の範疇にある学習者を下位群日本語学習者、7以上（「上級」以上）9以下（「超級」以下）の学習者を上位群日本語学習者とみなし本稿の対象とした。

調査協力者のレベル分けに参加した日本語教師は3名で、3名ともACTFLガイドライン利用の訓練を受けたことはなく、ACTFL言語運用基準を参考に記述に近いものを採用するよう指示した。訓練を受けていないということで信頼性の問題が浮上したため、初めの2名の評価者について相関係数（Spearmanの $\rho$ ）を算出した。その結果、作文評価の信頼性の高さ（つまり、評価者の評価の一致率が高いこと）を確認することができた（ $r=0.713$ ,  $p=0.000$ ,  $N=145$ ）。

- 7 採点対象外問題は、出題されている問題が正文から構成されている。逆に採点の対象となる問題は非文から構成されている。
- 8 採点の基準を述べる。2点満点は、インフォーマントの目標言語である日本語共通語の視点から、文法・語彙的あるいは社会言語的に適切な場合で、二重敬語も文法・語彙的、社会言語的に正しければ2点満点とした。また、問題設定のテンスと解答のテンスが一致していない場合（例えば「昨日」と問題設定があるのに、「行きます」や「いらっしゃいます」と非過去になっている場合など）、問題の設定に疑問文を表す終助詞「か」があるにもかかわらず、解答には終助詞「か」が欠落している場合（例えば、「A先生はわたしの家にうかがいましたか。」という問題で、解答を「A先生はわたしの家にいらっしゃいました。」となっている場合）に1点とした。因みにインフォーマントの目標言語である日本語共通語の視点から、文法・語彙的あるいは社会言語学的に不適切な場合、下線の動詞と訂正した動詞の意味が大きく異なった場合、古典敬語を用いた場合（例えば、「おっしゃいます」が音便化されずに「おっしゃります」になっている場合、「なさいます」が「なされます」あるいは「なさります」になっている場合、丁寧語がマス形以外の活用がされている場合など）は0点とした。
- 9 誤用訂正能力を比較する上で、「中・下-韓・下」および「中・上-韓・上」のそれぞれのパターンについて、同じ下位群同士（または上位群同士）で作文評価に差が出ていないことが望ましい。その確認をMann-Whitney U検定で行った結果、それぞれのパターンにおいて5%水準で有意差がないことが分かった（ $p=0.070$ ,  $0.089$ ）。
- 10 Shapiro-Wilkの検定では、標本が正規母集団のものであるとの仮説を検証する。
- 11 Mann-Whitney U検定はノンパラメトリック検定の一つで、独立した2群が同一であるという帰無仮説を立てることで差の有無を検証する方法で、パラメトリック検定である独立型t検定が用いられないときに使われる。2群の標本を合わせて変量が小さいものから順に1、2、3…と順位を付け（変量が同じ場合は同順位にする）、それぞれの群で順位番号を足したものが順位和である。比較する2群をそれぞれA群とB群としたとき、 $n_A$ と $n_B$ を標本数、 $R_A$ と $R_B$ を順位和とすると、 $U_A=n_A \times n_B + 0.5 \times n_B (n_B + 1) - R_B$ 、 $U_B=n_A \times n_B + 0.5 \times n_A (n_A + 1) - R_A$ となり、小さい方がU値となる。U値から検定表でp値が分

かる。順位和を標本数で割ったものが平均ランクで、有意差が出たときに平均ランクが大きい方が変量も大きいと見る。詳しくは渡邊他 (1990 : 125) を参照。

- 12 ノンパラメトリック検定における3群以上の間における多重比較法で、群を1つずつ減らし、最終的に2群になるまで全ての組み合わせについて検定を実行する方法がある。この場合なら、3群を2群に減らし、全ての2群の組み合わせに対しさらに検定をかけることになる。群を減らして検定をかける際、それぞれの段階で初めの有意水準を保つことが出来なくなる。多重比較における各々の段階で適応される有意水準を Tukey-Welche choice の式から導かれる(永田・吉田 1997:109)。

Tukey-Welche choice の式： $p = 1 - (1 - a^{\frac{n}{m}})$  【a：初めの段階での有意確率、m：群数、n：今多重比較を行っている群数；但し  $n=m-1$  の場合、 $p=a$ 】

Tukey-Welche choice の式から、この場合  $a=0.05$ 、 $m=3$ 、 $n=2$  なので、有意水準  $p$  は  $0.05$  のままでよい。

- 13 Levene 検定は比較する独立した2群の母分散が等しいこと（等分散性）を帰無仮説とした予備検定で、通常棄却されないことを前提に独立型 t 検定を行う（されたら、Welch の検定のような自由度を近似した t 検定を行う）。
- 14 心理言語的転移は、L1 と TL が言語学的に類似しているか否かに関係なく、学習者が L1 と TL の違いが心理的に小さいと感じることで起こる転移である。また、社会心理的転移とは、社会心理的要因（大人か子供か、FI を受けているか自然習得か、産出の時間的余裕があるかないか、项目的学習か体系的学習か、どのような背景で産出されたか）が影響する転移である。

## 参考文献

- 内田 治 (1997) 『すぐわかる SPSS によるアンケートの調査・集計・解析』東京図書
- 蒲谷 宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 菊地康人 (1997) 『敬語』講談社
- 金田一春彦・林大・柴田武（編）(1988) 『日本語百科大事典』大修館書店
- 熊井浩子 (1992) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11(13), 72-80
- 輿水 優 (1977) 「中国語における敬語」『岩波講座日本語 4 敬語』273-300
- 佐治圭三 (1983) 「中国人学習者の間違いやすい敬語表現」『日本語学』2(1), 38-49
- 永田 靖・吉田道弘 (1997) 『統計的多重比較法の基礎』サイエンティスト社

- 平林周祐・浜由美子 (1988) 『外国人のための日本語例文シリーズ 10 敬語』  
荒竹出版
- 牧野成一 (1995) 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』 The American  
Council on the Teaching of Foreign Language
- 宮地 裕 (1982) 「丁寧体」 日本語教育学会 (編) 『日本語教育辞典』 大修館  
書店
- 宮田剛章 (2004) 「中級中国人日本語学習者の敬語動詞の誤用訂正能力」  
『都大論究』 41, 24-34 東京都立大学国語国文学会
- 宮田剛章 (2005) 「中国・韓国人日本語学習者の敬語習得に関する一考察－  
滞在期間・学習期間からみた敬語習得－」 『日本語研究』 第 25 号 東京都  
立大学国語学研究室日本語研究会
- 渡邊宗孝・寺見春恵 (1990) 『ビギナーのための統計学』 共立出版
- Faerch, C., & Kasper, G. (1987). Perspectives on language transfer. *Applied  
Linguistics*, 8(2), 111-136.
- Zobl, H. (1980). The formal and developmental selectivity of L1 influence on L2  
acquisition. *Language Learning*, 30(1), 43-57.